

足利義尚
所 持 狐草紙絵巻をめぐって

宮 次 男

一

中世小説の中で、お伽草子と称されるもののうち、その多くには絵が挿入されている。それらの画態は、一般的にみて、庶民的で卑俗な町絵風のものが多い。しかし、当時の公家日記、例えば、『看聞御記』、『実隆公記』などをみると、到底、このような下手げっぽい作品で満足する筈のない上層社会の人々の間でも、お伽草子の絵巻は享受されていたことを知るのである。そして、町絵風な、或いは奈良絵風な作品と明らかに一線を画す、優れた画格の本格的な絵師の手になるお伽草子の絵巻もかなり遺存しているのである。

ここに提示する「狐草紙絵巻」(紙本着色紙本着色 縦一七・二寸)は、まさに室町時代におけるそうした上手のお伽草子絵巻の一例で、『考古画譜』に

狐物語 一卷

〔補〕古畫目錄云、狐物語繪、光信、

〔補〕本朝畫圖品目云、狐雙紙一卷、

古畫類聚目錄云、光信筆、

狐草紙絵巻をめぐって

倭錦云、土佐光信狐草子、

貫雄曰、住吉家藏、詞書筆者古筆了伴、爲三飛鳥井雅春卿、檜山成徳、

爲三甘露寺親長卿、

〔補〕眞頼曰、狐草紙一卷、原本予これを見る、巻末に住吉廣通の紙中極書あり、光信としるせり、

〔補〕四郎曰、今税所子爵の藏

と記載されるものである。かつて、梅津次郎氏は「国華」八二八号(昭和六年三)所収「硯破絵巻その他―小絵の問題―」で、この絵巻の善写した模本をとりあげられ、硯破絵巻の画態との比較から、この両者を同筆と想定されているが、その洞察力には今さらながら敬服させられる。

この狐草紙の本文は、すでに『新編御伽草子』下(萩野由之編、明治三十四年六月刊)に収録され、近くは古典文庫一一七『室町時代物語』三(横山重・太田武夫共校)に詳細な解題をつけて校刊されている。しかし、両本とも、原本から翻刻しておらず、新編お伽草子本は、誰かが世に行なわれる「御伽草子」にならって、続集を刊行するために二十種の草子物語を集めおいたものをそのまま紹介・翻字したものであり、古典文庫本は、大東急記念文庫

蔵の絵巻を底本とし、国会図書館本を校合に用い、宮内庁書陵部本を参考に行っている。従って、未だ原本からの翻字は行なわれておらず、本稿の末尾に全文を紹介・翻刻することは美術史学界のみならず、国文学界にいささか貢献できるのではないかと、ひそかに満足する次第である。

狐草紙諸本については、『室町時代物語』三につけられた解題にゆずることにして、ここでは略すが、これら諸模本の本文と本絵詞を比較すると、いずれも

ひてうは文とりてかへりぬ

という文章で始まっている。これは物語の途中からの叙述と思われるが、萩野由之氏は頭注して

あまり突如なる書出しなれば、前の缺けたるかとおもへど、然にはあらず、わざとなしたるにてもあるべし、

と考えておられるが、後述するように、これは第二段の詞書で、第一段の詞書は欠けているから、「前の欠けたる」文章ということになる。そして、いずれの本も、多少の語句の相違はあっても、殆んどが同一であって、本絵詞がこれら諸本の原本になっていることは、ほぼ間違いないと考えられる。

二

この絵巻の内容は、ある歳老いた僧都が牝狐にたぶらかされて、これと情交を結ぶが、地蔵によって救われるという、怪婚説話と地蔵の利生を結びつけたものである。

第一段は詞書を欠き、絵は文を読む老僧の前に、美しい女性がしどけなく坐っていると、庭には秋草が風になびき、築地塀には朝顔のつるがからんで、なかなか風情のある情景となっている。この場面は次の詞書から、美しい文使いによってとどけられた僧都宛の文を、老いの身をわすれて胸をときめかしながら読むところとみてよいであろう。

(挿図1)

第二段 詞は前述したように「ひてうは文とりてかへりぬ……」と書き出している。「ひてう」については、萩野氏は頭注して

ひてうは使の名なるべきか、もして美女の假名にや

とし、『室町時代物語』三の解題は

この「ひてう」とあるは「美女」の謂であらう。

とする。いずれにしても、国文学者の解釈にまかせて、ここでは解答はさけ、たゞ「ひてう」と記述するにとどめる。

僧都の返事もちかえった「ひてう」は、再び女房の恋文を持参した。それには僧都に夜ふけに忍んで来てほしいとあり、更に車を迎えに差しむけると書いてあった。僧都は必ず訪れることを返事して、髪を剃り、入浴などして夜のふけるのを待った。廿日の月が昇る頃、八葉の車を伴って、例の「ひてう」がむかえに来たので、僧都は彼女と同乗して、女のもとに向った。

絵は縁側で裸になって身体を洗い、頭から湯をかけている老醜をむきだした僧都と、車を伴って迎えに来た「ひてう」が門にかかるのを、法衣にきかえて待ちうけている僧都。(挿図2)「ひてう」の後方には詞書にある通り、美しい童が駆る牛車と、三人の従者が下弦の月の下に描き

挿図 1 文使の女（第1段）

挿図 2 僧都の身づくろい（第2段）

挿図 3 館へ到着（第3段）

挿図 4 召使いの宴（第4段）

挿図 5 狐身にかえる (第5段)

挿図 6 僧都正気にかえる (第6段)

挿図 7 僧都故郷へ帰る (第6段)

挿図 8 僧都娘と語る (第7段)

出されている。この段の前半、僧都の邸内の描写は、後半及び他の段に比べてやゝ筆致があらくなっているが、これを別筆とみなす積極的な論拠はない。

第三段 十町ばかり行ったところに目的の邸がある。薄檜皮葺の門から車をのり入れ、秋草の乱れ咲く庭に車をつけると、僧都は女郎花色の生絹の袴をつけた女房に導かれて屋内に入った。そこには琴や琵琶がたてかけられ、襖で仕切った奥の部屋では、楊貴妃、李夫人をしのぐばかりの美女が待ちうけていた。僧都は彼女のそばに寄り添ったが、あまりのことに心は乱れ、わなわなとふるえる始末であった。和歌の応酬などがあった、やがて二人は枕を交わした。

絵は、秋草の咲く庭から、建物の縁に車の後部がつけられ、女房が車中の僧都に手をさしのべるところ(挿図3)、琴、琵琶が襖に立てかけてある控えの間において、奥の部屋には僧都と姫君が語らうところが描かれている。調度の屏風や襖には、草花や流水などが描きこまれ、画面の上下には厚くすやり霞が引かれて、二人の語らいをクローズ・アップさせている。女性の若やいだ美しさと、僧都の老相は対照的で、観者の想像力を刺戟する。(図版1)

第四段 翌日、手水がすみ、食事が出されたが、そこには魚の料理が色々と調えられているので、僧都は、このようないぶかしい身であるが、魚、鳥を食することはひかえておきますという、ほどなく精進料理がはこばれて来た。給仕する者もみな美しく、僧都はこのような美しい人々と暮らすことになれていないので、空はずかしく、なれぬことが多いので、気疲れでくたびれてしまった。

侍者たちの部屋をみると、多くの男女が酒をくみかわし、にぎやいでいる。僧都は多くの知行所をもつ身分をうらやみながら、年月日を送った。

絵は、僧都と姫君が食事をとるところと、薄、萩の咲く中庭を隔てた一室で、侍者たちが楽しげに酒を飲み、囲碁に興ずる光景。(挿図4)

第五段 僧都は何の懸念もなく、この姫君と愛の戯れに日夜をすごしていたが、ある日、門から錫杖を持った若い僧が三四人入って来た。これを見て、主人の姫君をはじめ、召使いの者たちは逃げまどいだした。僧都が、あさましく逃げまわる者たちをみると、老も若きもみな狐の姿となっていた。

絵は僧都と姫君が縁近くで外を見ると、その奥の部室では狐たちが逃げまどっている。外をみる姫君の足先がすでに獣足になっている。(挿図5)

第六段 僧都は夢うつつの思いであたりをみまわすと、そこは「こんなかしやういん」の大床の下で、いままで御簾や畳と思っていた物は、むしろやこもきれであり、琴や琵琶は馬や牛の骨、美しい着物は反故切れや古い草子の端をとりあつめたものであった。僧都はこれを見て、恐れおののき、高這いに這いだして、ようやく南大門の下へ逃げ出た。この有様をみた小童たちは、みな手をたたき、足をふみならして笑いののしった。折りからここを通りかかった旧知の近衛殿の侍は、この様子を見て驚き、ことの次第を僧都にたずねるが、僧都はただ口ごもるばかりで何も語らない。そこで侍は、僧都の身につけた紙切れをはがし、自分の着ている直垂をぬいで、僧都に着せかけた。僧都はそれを着て故郷へ

蔵 某氏
 帰って行った。この僧都は背丈
 が高いので、直垂の上だけでは

脛高になって、その姿のおかし
 い事はかぎりなかった。(挿図
 6・7、図版2)

なお「こんかうしやういん」
 は、『新編御伽草子』では金剛
 聖院としているが、美福門院得
 子御願の金剛勝院が康治二年
 (一一四三)八月六日に供養さ
 れており(百鍊抄第七)、あるいはこの
 金剛勝院のことではないかと思
 われる。

絵は寺院の床下で、白骨の散
 らばる中に、草子の着物をつ
 け、あぐらをかいて堂々と坐っ
 ている僧都、高這いに逃げ出す
 僧都、門の下で、子供らに笑わ
 れながら侍に直垂をもらう僧
 都、腰から下をむき出しにし
 て、子供らにはやしたてられて
 歩く僧都が連続的に描き出され
 ている。

第七段 故郷に帰った僧都は、娘にあうが、その姿をなさけなく思っ
 た娘は、自分の着ている小袖をぬいで僧都にきせかけ、ことの次第をた
 ずねた。僧都はすべてを娘に語ったが、その後をうけて詞書は

昔も今も地藏の御本誓ありがたくこそおぼえけれ
 と、地藏菩薩の徳をたたえている。

絵は小袖をきた僧都が袖口を目にあてる娘と語るところで、僧都の顔
 には、思いなしか安らぎの表情が窺われる。室内には水墨画の山水図屏
 風がたてられ、おちついた情景にあらわされている。(挿図8)

三

以上のように、この物語のモチーフは人間と狐の怪婚説話と地藏の利
 生とからなる。人間と狐との怪婚説話はかなり多く伝えられている。中
 世小説の中でも、狐草紙のほか、「木幡狐」「玉水物語」「玉藻草紙」が
 あるが、本絵巻のように、神仏の靈験によって人間が救われるという構
 成は、むしろ古代末期の説話文学に近い趣きがある。「扶桑略記」に引
 用されている「善家秘記」に、三善清行が寛平五年(八九三)備中介と
 して赴任した時の話が載っているが、それは備中国賀陽の良藤という者
 が狐と交り、自家の蔵の床下で暮らしていたのを観音の変身である優婆
 塞によって救いだされたというのである。この話は『今昔物語』巻十六
 にも収載されて、「備中国賀陽の良藤狐の夫となりて観音の助けを得る
 語」と題されている。また、この良藤の話と狐草紙は、細部に共通する
 ところがあって、伝承説話と中世小説のつながりを考える上に興味ある
 問題を含むが、狐草紙の場合、法華経や観音とちがって、地藏が救済者

として登場している点は、立山地獄における救済者が『日本国法華験記』では観音であったのが『今昔物語』以降は地蔵になっていることも関連するところで、中世における地蔵信仰の盛況を物語るものということができよう。

地蔵の利生によって、怪婚生活からよみがえるという構想の説話に「地蔵堂草紙」があげられる。これの本文については、すでに市古貞次氏によって古典文庫五三『未刊中世小説』三(昭和二十六)で紹介されており、絵(昭和三十一年二月刊)で「地蔵堂草紙について」と題した拙稿がある。

地蔵堂草紙(挿図9)の内容は、越後のある地蔵堂で如法干日の写経をしていたある僧と、僧のもとにたび／＼来聴した美女とが結ばれて、美女の案内で

挿図9 地蔵堂草紙

竜宮に赴いた僧が、再び人間界にもどり、蛇身となっていた体を地蔵菩薩に祈願して、もとの人間の姿を得、その後は地蔵に念じた通り、法華経を書写して罪をつぐない、遂に極楽往生をとげるに至ったという物語で、その説話構成は、怪婚説話に地蔵の靈験と法華経の功德を結びつけたものである。しかし、この地蔵は「矢田地蔵縁起」などの地蔵靈験説話にみるような積極的行動はとっていない。

狐草紙と地蔵堂草紙は、以上のように、共に地蔵が最後まで表面にあらわれず、また、画面にも示されることなく、物語の背後にあって、筋の展開の重要な契機となっている。このことは、両者の説話構成上の共通点として注目すべきである。更に、地蔵堂草紙と狐草紙の画態・作風がきわめて類似し、同一筆者の作ではないかと考えられる程であることは、この二つの説話を絵画化する画家の創作態度が最後まで地蔵の姿をふせておくという点で共通していることとあいまって、一層興味をおぼえさせる。すなわち、現存のこれら二絵巻は、現存本をもってオリジナル作品であるとする可能性がきわめて強いことを示唆するからである。

四

狐草紙絵巻に該当すると考えられる絵についての古記録をもとめると、

實隆公記 明應六年(一四)十月十五日條

中山中納言來談、滋野井繪二卷令見之、一卷狐繪常徳院殿御物也、一卷八幡臨幸繪等也

言繼卿記 天文十一年(一五)正月廿二日條

薄所勞、罷向相尋候、聊可然、云々、次内侍所へ罷向、予源氏取て罷歸候、狐之繪見度由女房衆申候間、二卷借遣候了、の二種の狐絵が挙げられる。

このうち『言繼卿記』は二巻とあって、現存本と巻数が合わない。現存本は巻初が欠けているが物語の内容から、逸欠部が一卷分とは考えられないので、この二巻本は別本と考えた方が穏当であろう。

藏 某氏 『実隆公記』に
常徳院殿、すなわち足利義尚の御物

也と注記する狐絵一卷と現存本とは、両者を直接結びつける証拠はないが、同本である可能性が一番強い。

義尚は二十五歳の若さで、長享三年(一四八九)三月二十六日に、近江陣中で歿している。実隆は義尚の

挿図10 硯破絵巻

遺品として注記したわけであるから、この絵巻の製作は長享三年以前であることは確である。

では現存本は、はたして、長享三年以前の製作と認めてよいであろうか。

この絵巻の巻末には住吉如慶、具慶父子による左の紙中極書がある。

土佐光信朝臣筆 通(伯取) 純(伯取)

これは『倭錦』他の古画目録類が土佐光信筆と鑑定している狐物語絵、或は狐草子に相当すると考えてよい(紙中極書の筆者名と古画目録類の鑑定が相違するものに前記「地藏堂草紙」があり、これは探幽の紙中極が土佐光持筆であるのに対し、『倭錦』などは光信筆としている)。また、これらの諸鑑定が一致する通り、これを光信筆としてよいであろうか。

土佐光信の絵巻遺品として、ほぼ確証ある作品としては、

文明十九年(長享元・一四八七) 星光寺縁起絵巻

明応六年(一四九九) 石山寺縁起絵巻第四

文龜三年(一五〇三) 北野天神縁起絵巻

水正一四年(一五一七) 清水寺縁起絵巻

が挙げられるが、他に管見するところ、その作風から、光信に比定することが可能なものに、

明応四年(一四九五) 槻峯寺建立修行縁起絵巻

同年 硯破絵巻

年代不詳 化物草紙、地藏堂草紙、平家物語絵巻

を挙げることができる。

先に提起した問題は、これら光信筆と確定或いは推定される絵巻と本

絵巻を比較検討することによって、自ずから結論が導き出されよう。

梅津次郎氏は、前掲の「国華」八二八号で、本絵巻と硯破絵巻とが同一筆者、すなわち光信の作と推定しておられる。私もこの御意見と同じであるが、では本巻をこれらの諸絵巻の中で、どの辺に位置づけるのが最も適当であろうか。

東京国立博物館蔵

挿図11 清水寺縁起

幸にして、光信の絵巻には年記の明らかな作品が多いが、最も早期の「星光寺縁起」と晩年の「清水寺縁起」の間では、三十年間の隔たりがあり、当然、この両者には作風の上でもかなりの相違がある。その間、明応六年の石山寺縁起は、先行の絵巻の欠を補って製作されているため、多少画趣を異にしているが、他

米国フリア美術館蔵

挿図12 槻峯寺建立修行縁起

の作品はいずれも星光寺縁起よりは清水寺縁起により近い作風をもっている。明応四年の硯破絵巻（挿図10）を例にすると、環境描写をあまり行なわず、詞の説明図として対象に近寄ってこれを描写しようとする観照法がとられているが、これは星光寺縁起にもいい得るところである。しかし、硯破絵巻には、しつとりと落着いた画趣があつて、清水寺縁起（挿図11）を指向する作風上の展開がくみとられる。また、同じ明応四年の「槻峯寺建立修行縁起」（挿図12）にみる土坡や岩皺には、光信独自の枯れた描線が認められ、星光寺縁起より清

水縁起に近い様式が示されている。また人物描写では、星光寺縁起（挿図13）は非常に庶民性の強い人物で、その表情も明るく華やいだ者が多く、この傾向は、応永二十一年（一四一四）の融通念仏縁起（京都 清涼寺蔵）や、文明十四年（一四八二）に藤原久信によって補写された慕帰絵巻一、七に近い近世的な卑俗性があるが、明応四年の二絵巻には、むしろ中世的で枯淡な趣きの中に古典性ともいべき落着がみられる。そして、年記はないが「化物草紙」（挿図14）の人物はこの中間に位置する

東京国立博物館蔵

挿図13 星光寺縁起

と考えられる。
このようにみてくると、光信の作風は明応頃に一転期があったと考えることができる。
狐草紙絵巻をこれら光信筆の絵巻と対比させると、構図の扱い方では、星光寺縁起や硯破絵巻に通ずる対象に接近した観照

態度が示され、その明るい色彩感覚は星光寺縁起に特に近い。人物描写でも、細く柔軟な運筆は星光寺縁起に近く、また風俗画的な要素が濃厚で、近世的な庶民性が強い。また、秋草の薄い長い葉を、つけたて式に太目にあらわすことが行なわれているが、これも星光寺縁起絵巻下第六段（挿図15）や、慕帰絵第一巻第二段にもみられるところである。

以上の特色からみて、本絵巻は光信作品の中で最も星光寺縁起に近いことは否定できない。従って、その製作も星光寺縁起と相前後する頃と推定されるわけであるが、更にこれを『実隆公記』にみる常徳院殿御物とみなすことは年代的にも何ら矛盾しないばかりか、殆んど同時

米国ボストン美術館蔵

挿図14 化物草紙

代に同一の絵巻が二本、それも原初的なものが存在するとは考えられないので、本絵巻を足利義尚の遺愛品とみることに付いて、異存はないであらう。

挿図15 星光寺縁起

元来、この絵巻のような縦一七・二糎ほどの小品絵巻は、梅津氏がす

したということは、彼の社会的環境からみても、当然といえよう。かかる意味から、何ら文献的証拠はなくとも、本絵巻や硯破絵巻は、様式的特色及びその所有者からいって、土佐光信筆と考えることはもつとも穩当である。更に本絵巻と縦の寸法が一致し、内容的に共通する地藏堂草紙についても、「国華」八五一号に紹介した時（昭和三十八年二月）には、光信筆に推定することを躊躇したのであったが、以上の二絵巻と関連させて、これも光信筆と推定して然るべき作品と考えられる。また、これも堂上、或いは將軍家関係の遺品であったと推定するものである。こゝに前稿の不備を補う次第である。

でに指摘しておられる（「国華」八二八号同氏論文）ように、堂上公家、或いは足利將軍家などにあつて、低年齢層のお伽用として用いられたと考えられるが、先にふれた硯破絵巻も縦一五糎で、その巻末に

明應四年十一月廿九日

源 義高

と、足利義澄の十五歳の時の署名があり、それとの関連において、本絵巻も義尚が十五、六歳の頃に所持していたと考えると、文明十二、三年頃には製作されていたことになり、光信筆の絵巻としては最も早い頃の遺品ということになる。更に、当時絵所預として名譽の職にあつた光信が、將軍家にも出入し、その子弟のために、このような草紙の絵を製作

狐草紙繪卷詞書

異体、変体文字を現行の書体に改め、句点を
つけて読み易くした。改行箇所は原文通り。

〔絵一〕

ひてうは、文とりてかへりぬ、しはしあり
て、このつかひに、人をつけて、ゆくところを
みいれて、をくへかりける物をと、思ひ
たるところに、このひてう、いそきて、文
とて、又さしいたり、そうつ、とりて
みれば、ひころ申たくはさふらひつれ共、
御心もいかくと、つゝましくて、うちすき候へ
とも、思ひあまり、申候つるに、御返事御うれ
しくこそ候へ、これには、おとなしやかなる
人こそ、よく候へ、わかき人は、心おほくてはつか
しく候、そなたにも御心よせに候へはこそ、かやう
にこまくと、うけたまはり候らむ、いつしか
なるやうに候へとも、こよひ、おなしくは、御物
こしにても、申候はや、それへ、まいりたく候へ
とも、おほるけにては、かるくしく、ありき
なとする身にても候はず、夜ふけかたに
しのひて、御わたり候へ、御ともの人も、むつ
かしく候へは、これに、くるまも候、御むかへに、
まいらせ候はん、とそかきたりける、そうつ、いよ
「く

物見などもせんすると、いよ／＼心ちよくて、

返事をそ、かきたりける、たちかへり、

かやうに、うけたまはり候こそ、心うれしく候へ、

夜ふくるほとに、まいり候へし、雨かせ

ふき候とも、かならず／＼とそ、かきたりける、

そうつ、みめことからも、さすか、わかより、

心いろめきたる人にて、かみそりゆひき、

まゆのしもうちはらひ、のこるまゆけ、

いとすくなく、しろ／＼と、うちちりたり、

こゝろけしやうして、老のなみの、よるを

まち侍るに、廿日月、さしいつるほとに、

くるまのをとして、もんをあげ、さきの

ひてう、しるへしてきたり、八ようの

くるまの、さるていなるに、あめなるうし、

かけて、廿はかりなるわらはの、きよけ

なるか、くるまやりいれたり、ちうけん、

おほしくて、ひた／＼れきたるおとこ、二三人

くしたり、そうつ、くるまにのりて、

〔絵二〕

かひてうをも、しりにのせてけり、

いまは、十ちやうはかりも、ゆきぬらむと

おもふに、うすひはたなる、むねかとの、うちへ

いれたり、庭には、あきのなかなはなれば、

なにとなき草花さきみたれ、くるま、

さしよせられたは、をみなへしの、す／＼の

はかま、きたる女はうの、おとなしやか

なるか、いて、うちへみちひく、そらたき、

みち／＼と、よろつ心あるさまなり、

一まなるところに、こと、ひわ、たて、きちやう

にはあらで、ひき物したるうちに、すこし、

ゐはつれたる人をみれば、やうきひ、

りふしん、のよそほひも、これには過し

とそみえたる、そうつ、さしよりて、そはに

ゐたり、いかにある事そと、あまりの

ことに、むねうちさきはき、わな／＼とふるはれ

たり、あり香、なつかしく、まゆのあたり、

くちつき、あひ／＼として、いふことの葉、

いとすくなく、ゆかしきさまなり、こは

いかに、これほとの人に、ちかつくくわ

ほう、ありつらんことよと、おほえず、なく

心ちせられて、とかくためらひ、しはし物

かたりなとしてゐたるも、こゝろもと

なくて、はやとく、うちそひて、ねはやと

おもひて、

わかために、ありける物を、よし野山、

人にしられぬ、花のすみ家は、

といひければ、なにとなきやうにて、

枝ならぬ、身なれば風も、しらぬにや、

はれのすみかと、君はいへとも、

といへは、そうつ、かんにたへかねて、此こと

はに、つきて、やかて、ひたととりつきて、

ふしにけり、いよくちかまさり、かきりなし、

〔絵三〕

日たくるほとに、おきぬれば、御てうつ、たてまつり、やかて、くこそを、まいらせける、うをいろく、とくのへたりければ、そうつ、かゝるふしきの身なれとも、うを、鳥くふ事は、ゆめくなしと、いひければ、ほとなく、しやうしむの物を、したゝめて、まいらせたり、みやつかひの人くいつれもく、めやすきさまなり、そうつ、かやうに、きらくしき人にもめなれず、空はつかしくて、物もくはず、なましひに、身をつくろひ、夜もうちとけてねられず、ならばぬ事ともおほし、くたひれはてゝそ、おほえける、さふらいのかたをみれば、おとも七八人、女はうなど、あまたありて、さけのみてあそひ、まことに、しる所あまたあるにこそ、ともしからて、こゝろにくし、かくしつゝ、とし月をそをくりける、

〔絵〕

かゝりけるほとに、そうつおもふ事なく、女はうと、たはふれるたる所に、もんのかたに、人のあまた、をとしければ、みやりたるに、

狐草紙絵巻をめぐって

わかきそうの、しやくちやうもちたるか、三四人はしりいたり、これを見て、あるしの女はうをほしめて、ありつる物とも、われさきにと、にけはしる、そうつ、あさましくて、にくる人くをみれば、老たるも、わかきも、きつねになりて、みな四はうへ、はしりうせにけり、

〔絵五〕

そうつは、ゆめかうつゝか、さても、わか身は、ねたりや、ねすや、などおもひ、いゑのうちを見まはせば、こんかうしやういんの、大ゆかのしたなり、みすや、たゝみとおもひしは、むしろ、こもきれなり、ひわ、ことなとゝみえしは、むまや、うしのほねなり、はんさう、たらひ、いろくのてうとゝみえつるは、くちつほのわれ、されかうへなとなり、そうつ、きわめて、おくひやうなる物にて、こはいかなる事そと、あしもはたらかず、身もすくみて、めうちたゝきて、あきれてそ、ゐたりける、色々に、うつくしき物、きたりと思ひしは、ほんく、ふるぎさうしのはしを、とりあつめたるにそ、ありける、さてしもあるへき事ならねは、たかはいにはい出て、やうくとして、みなみの大もんへいてに

けり、こわらはへとも、これを見て、てをたゝき、あしをそらにして、わらひのゝしる事、かきりなし、こんゑ殿のさふらい、物へまいりけるか、こんかうしやういんに、わらはへとも、あつまりて、物をわらひけるほとに、なに事そとおもひて、たちより、みれば、としころ、あひしれる、そうつの御はうなり、すかた、めもあてられず、こはいかなる事そと、とひけれとも、もうくとして、いひわくる事もなし、わかきたるひたゝれの、かみをぬきて、きせ、かみきれをは、ぬかせにけり、こきやうへ、かへるに、このそうつ、きわめて、たけたかかりけるに、ひたゝれの、かみはかりきたれば、はきたかにて、おかしき事、かきりなし、

〔絵〕

さて、こきやうに、ゆきつきぬれば、むすめ、みつけて、うれしなから、そうつのすかたをみるに、あさましき、かきりなし、わかきたりけるこ袖を、ぬきてそ、きせにける、ことのありさまをとへは、しかくといふ、むかしも、いまま、地さうの御ほんせい、ありかたくこそ、おほえけれ、七ねんかほとこのたのしみは、

三九

七日かうらにてそありける、

〔絵七〕

(奥書) 土佐光信朝臣筆

通廣 (自文)

純廣 (自文)

狐草紙絵卷寸法 (単位釐)

縦横	17.2 822.1				
1	64.8	I	絵		
2	63.2	II	詞		
3	65.7	II	絵		
4	65.0	II	絵	III	詞
5	61.1	III	詞	III	絵
6	64.5	III	絵		
7	63.7	III	絵	IV	詞
8	64.5	IV	絵		
9	31.2	IV	絵	V	詞
10	34.0	V	絵		
11	56.6	VI	詞		
12	65.0	VI	絵		
13	62.1	VI	絵	VII	詞
14	41.7	VII	絵		
15	19.0		奥	付	

図版要項

一 狐草紙絵卷 部分(原色刷) 某氏蔵

二 同 部分

紙本着色 縦一七・二cm 全長八二二・一cm
一・二 宮次男 「足利義尚所持狐草紙絵卷をめぐって」参照

三 千手観音像 滋賀 延暦寺蔵

木造 像高一・五cm

四 聖観音像 部分 静岡 熱海美術館蔵

木造 像高八九cm

五 十一面観音像 滋賀 向源寺蔵

六 同 側面

木造 像高一九三cm

三一六 久野健「平安初期における延暦寺の仏像」参照